

コラム・上山信一の「続・自治体改革の突破口」

第 137 回 なぜ武雄市立図書館はすごいのか——ツタヤ、スタバとのコラボ(下)

前回(6月10日号)は今、全国で話題の武雄市立図書館を訪問・利用した印象を紹介した。今回は樋渡市長や図書館職員、運営受託者であるカルチャ・コンビニエンス・クラブ(CCC)へのインタビュー取材で伺ったお話も参考に、このプロジェクトの意義を考えたい。

●CCCと共同で投資

最初にプロジェクトの内容を確認したい。これは、武雄市立図書館とCCCの共同事業である。図書館は、リニューアルを機に事務スペースを転用して一部フロアをCCCに貸し出した。CCCは図書館の建物内にレンタルDVD店、書店、カフェ(スターバックス)を開設し、賃料を年間600万円払う。また、CCCは図書館部分の指定管理者となった(5年間受託)。リニューアルに際し、市は4億5000万円を、CCCは約3億円(商品仕入れ代金を含む)を投資した。図書館のスタッフは市の職員が3人、CCCが16人(館長1人、司書15人)である。

●官民共同事業の成果

共同事業の成果は顕著だ。開架図書数が10万冊から20万冊に増えた。公共図書館はどこでも予算の制約から雑誌の品ぞろえに苦労しているが、ここではCCCの店頭にある雑誌が自由に読める。もちろん欲しくなったら買って帰れる。開館時間は4時間も延びて午前9時から午後9時までとなった。閉館日がなくなり、年中無休となった。雰囲気よさは前号で報告したとおりだが、すぐ横にあるカフェのインパクトが大きい。楽しい、人と会う、語らいの場という雰囲気をかもし出し、若者や子連れの母親達が集まるようになった。

結果的に平成20年度(2008年度)から漸減していた入館者数は今年のリニューアルオープン後、激増している。財政面では市はCCCに年間1億1000万円の委託料を払うが、これは従来よりも年間1億円のコスト削減となる見込みだ。

●イノベーションの本質

表面的な効果は以上のとおりだが、本件は官民連携による図書館改革の先駆事例として意義が大きい。第1に社会教育施設としての本来の使命を十二分に果たしている。本離れ、特に若者のそれはどこでも大きな問題だ。それは図書館にとっても課題だし、書店にとっては死活問題だ。本件はそれに対して図書館と書店、書店とカフェ、さらに書店とレンタルDVDやCD(音楽と映像)を組み合わせることで対処した。全てを同じ場所にまとめ、多様な

選択肢を用意する。そのことで市民の興味と関心を喚起し、集客に成功した。特に若い母親と子ども達、中高生に訴求した点はすごい。社会教育施設としての図書館の使命を十分に果たせなくなっている公立館が多い中、ここまで踏み込んだ意義はきわめて大きい。

第 2 に利便性の飛躍的な向上である。もとは普通の図書館だった。多くの公立館と同様に、書籍数は限られ、来訪者も限られ、開館時間も限られていた。それでいて運営費はかさんでいた。また広い面積を事務スペースが占めていた。リニューアルでは、スペースを顧客のために最大活用することにした。また、顧客ニーズを真剣に突き詰めた結果、カフェの併設やレンタル DVD 店と書店の併設という“ワンストップサービス”化に至った。顧客志向の発想は、開架の本の並べ方を従来の 10 進法の図書館分類(哲学などが入り口に来る)から利用者の利便性を考えた順番に配列する工夫にもつながった(料理、医療、旅が入り口近辺に来るなど)。

第 3 に生産性の改善と財政上の貢献である。営利事業との並存は、スペースの生産性向上だけでなく、来館者数の拡大、賃料収入をもたらした。また、指定管理者は市役所からの収入だけでなく営利収入も使ってサービスの充実が図れる。年中無休のサービスの実現はそのたまものだ。店も併設しているから普通の指定管理だとありえない数のスタッフの確保につながった。それがひいては借りた本の宅配返却などのサービス向上にもつながっていた。

第 4 に武雄市を有名にした。文化と教育を重視し、改革に挑んでいるという姿勢が全国に伝わり、市の知名度とイメージ向上に寄与した。

## ●全国へのインパクト

今の時代、インターネットの普及で図書館はもちろん、紙の書籍の存在意義すら問われている。記録や保存が使命の国立国会図書館や都道府県立の図書館は別として、特にふつうの公立図書館は存在意義を問われかねない状態である。

今や誰でもネットで簡単に情報が手に入る。稀少書もネット書店で買え、あるいは全国どこの図書館からでも借りられる。司書がやっていたレファレンス機能もグーグルなどの検索エンジンに取って代われつつある。そういう時代であるにもかかわらず、多くの公立図書館は図書整理日と称して年に何日も休館し、夕方に早々と閉めている。

武雄市の成功例はこのような旧態依然の全国の公立図書館のあり方に黒船的ショックを与えている。

武雄市立図書館は、図書館法や司書制度を盾に「図書館を守れ」と主張する業界関係者や御用学者から「いかがなものか」という批判を受けている。しかし批判の多くは「公立の使命が果たして民間企業に果たせるか」といった抽象論が多い。公立としてまともに使命を果たそうと真剣に考えた末に出てくるアイデアが、この場合は CCC との連携だったわけである。そしてすさまじい実績を出している。民間の力を借りたら図書館の使命が損なわれると

いう識者の批判は全くあたらない。

武雄市の事例に刺激を受けて全国の公立図書館の見直しが始まることを願う。

(注)ただし、公共施設のあり方は常に“サイトスペシフィック”であるべきだ。武雄市の場合、たまたま便利な立地も状態もよい建物だった。だからリニューアルを機にCCCとの協業が成り立った。カフェは明るいい場所に設置できたし、レンタル DVD ショップを置く場所もあった。だが、どこでも同じことができるわけではない。地域によって客層やニーズは違う。民間との協業は多くの場合、サービス改善、コストダウンにつながるが、うまく設計しないと従来の公立直営よりも悪くなる。見直しは“サイトスペシフィック”に考えるべきだ。

—◆執筆者・上山信一(うえやま・しんいち)◆—